

Japan Council on Independent living Center

2021 年度

JIL 全国セミナー
資料集

「3.11 から 10 年。福島の現在、過去、未来」

日時 : 2021 年 6 月 23 日 (水) 12:30-14:30

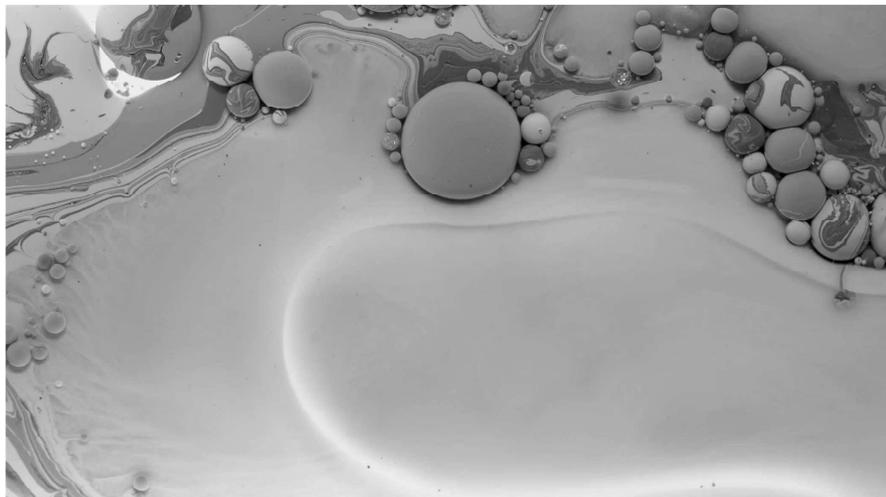
全国自立生活センター協議会

目 次

1. 白石清春（郡山市・あいえるの会） P 2
2. 長澤真治（福島市・ILセンター福島） P14
3. 和田庄司（郡山市・にんじん舎） P16
4. 青田由幸（南相馬市・サポートセンターぴあ） P18
5. 長谷川秀雄（いわき市・いわき自立生活センター） P20
6. 遠藤 美貴子（田村市・福祉のまちづくりの会） P26
7. 磯部浩司（横浜市・自立生活センター自立の魂） P28

東日本大震災から十年が経ちましたが

特定非営利活動法人・あいえるの会 白石 清春



2011年3月11日東日本大震災があり、それに伴い人災である福島第一原発の爆発により、福島県では復興までにはまだまだほど遠い時間がかかりそうです。

皆さまの強力な支援によりJDF被災地障がい者支援センターふくしまは立ち上がる

東日本大震災が起こり、早い段階でゆめ風基金やJIL、DPI、JDFなどの団体の全面的支援により「JDF被災地障がい者支援センターふくしま（以下支援センターと略す）」を立ち上げて、福島県内外に避難された障がい者の支援活動を行なうことができました。みなさん本当にありがとうございました。



支援センターでの支援 活動の思い出

支援センターでの活動は相馬、南相馬、いわき方面に支援物資を運ぶことから始まり、



福島県内の避難 所及び仮設住宅 の調査、



南相馬の障がい者事業所に
ボランティアの
派遣、



郡山市内に避難し
てきている障がい
者との交流を図る
サロンの開設、





東電賠償学習会、

福島県内の障がい者の避難拠点を相模原市に設ける活動、





他の業務の人たちを
福祉事業所等に紹
介する「福祉マッ
チング事業」、

福島県内外の
被災障がい者
の相談事業を
行なったこと
などを思い出
します。



二回目の頸椎手術でより重度になる(白石)

支援センターの活動であまりにも動き回りすぎ、二回目の頸椎手術を受けて、より重度になって支援活動がおぼつかなくなりました。それと同時に人材と活動資金が無くなったので、避難した障がい者に関する実態調査を行ない、それらをまとめた報告書を発行して、2016年4月をもって支援センターは解散いたしました。

手術前にハローベストを装着して、手術を行ないました。



人災である原発事故が起きて福島の障がい者運動は低迷する

原発事故により、福島のCILは壊滅的打撃を被りました。CILの主要なメンバーが超多量の放射性物質から逃れるため北海道、神奈川、京都、新潟等に避難していきました。原発事故が原因で自らの命を絶った障がい者もいました。福島には震災以前には運動体としての「福島県全身性障害者団体連絡会(福障連)」と事業体としての「福島県自立生活センター協議会(FIL)」という二つの団体がありましたが、震災以降、それぞれの団体が弱体化してしまい、二つの団体を一つにまとめて「福島県障がい者自立生活推進連絡会(福障連)」として活動を続けています。

福島県障がい者自立生活推進連絡会(福障連)の会議風景



「組織と人による絆」をもとに郡山洪水被害の際には連携した行動をする

令和元年（2019年）の台風19号に伴う洪水にて被害を被った幾つかの障がい者事業所がありました。東日本大震災の際に培った「組織と人による絆」をもとに、被害を受けた事業所を運営している団体（あいえるの会も入る）が集まり、被害状況を調査し、郡山市に被害を受けた事業所の建物の補修（国に要望すること）等に関する要望書を提出し、郡山市議会議員にも働きかけていきました。支援センターでの活動の実績があったからこそ、迅速に対応ができたのだと思います。

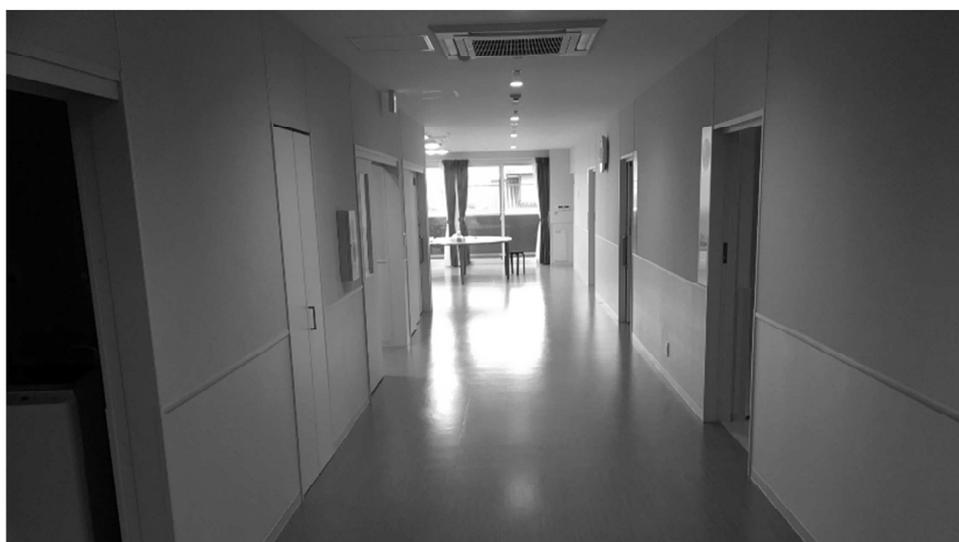
あいえるの会の事務所と自立移行住宅・あーすろーどを建設

あいえるの会では2020年の4月に事務所と自立移行住宅・あーすろーどを完成させました。あーすろーどは4名の重度の脳性まひ者が重度訪問介護のサービスを活用して、長期（3年間）にわたり自立生活の方法をマスターしていく住居形態です。今後も我が国では大規模の災害が起こっていくことでしょう。その際には、あーすろーどの共用スペースを開放して、少しでも多くの被災した障がい者の避難所として活用したいと考えています。

あいえるの会事務所(一階)と自立移行住宅あーすろーど(二階)



あーすろーど内部 (右が居室、奥が共用スペース)



入居者Mさんの居室



今日リレートークした仲間たちで東日本大震災と原発事故を風化させない行動を

震災と忌まわしい原発事故を経験してきた福島仲間たちが、十年前に起こった未曾有の出来事を風化させないで未来の人たちに伝え、その経験を活かし、今後にも起こりえる大災害に備えた減災・防災に対する提案のできる団体をここに集った皆さんで福島県内に創っていきませんか。

私の拙い話を聞いていただいてありがとうございました。
東日本大震災があって10年目の今日、私は71歳を迎えました。10年前は61歳でまだまだ元気とと思っていましたが、71歳ともなると心では元気とと思っていても、ちょっと無理をすると疲れやすくなりすぐに倒れてしまいます。でももうひと頑張り、福島県の障がい者の仲間たちが、災害で命が無くなることを防ぐことを目的にこれからも活動を続けていきたいと思っています。

2021年5月12日(水)作成

「災害の防災について障がい者の立場で考える」長澤真治(ナガサワ シンジ)

東日本大震災から10年が経ちました。

あの日、私は生まれて初めて大地震の揺れを経験し、災害の恐ろしさを学びました。

地震・津波といった災害というのは突然やってくる、その突然の出来事にどうすれば良いか正直、分かりませんでした。

災害の影響で家の中が大変になってしまった場合、障がい者は、福祉避難所へ行くことを考えます。しかし、家の中の被害状況が、それほど大きくない場合は、必ずしも福祉避難所へ行くことをしなくても良いのでは？と私は思っています。

福島市には福祉避難所が下記の通り2種類あります。

拠点的な福祉避難所とは？

災害発生時から要援護者を受け入れる避難所のことであり、福島市には、森合町に2ヶ所、渡利に1ヶ所、腰浜町に1ヶ所。合計4か所があります。

二次的な福祉避難所とは？

(社会福祉施設などによる二次的な福祉避難所であり、災害の種類、または規模などに応じて開設される避難所のこと)

福島市の二次的な福祉避難所は

身体障がい者施設が飯坂町に3ヶ所あります。

知的障がい者施設が(笹木野、南沢又、大波。)3ヶ所あります。

上記に障がい者が避難できる福祉避難所の場所を書きましたが、そんなに多くはありません。今後も災害というのは、続くと考えられますので早めの対策が必要ではないでしょうか？

障がい者の自宅に介助者がいる時に災害が発生した場合のことについて考えると、介助者と、一緒に避難することができます。また、自身の住んでいる地域の場所から避難所の場所が近ければ、すぐに向かうことが出来ると思うのでこの点については問題はないと思います。

福祉避難所の職員の障がい者に対する考え方に違いがあり、問題のある場合があります。それは、「障がい者の人も自分で自力で福祉避難所まで来てください。」という考え方をしている人がいるからなのです。

この考え方について私が思うことは、重度障がい者は、自分で移動することが困難なのに、そのようことをお願いをするというのは間違っていると私は思います。

重度障がい者の場合は、自分で動けない人が多く、介助者がどうしても必要なのですが、この部分を分かっていない職員もいること。

障がいの事情を説明しなければならないことにもなりそうです。

考えなければならないことは、障がい者が家に一人でいる時に災害が起きてしまった場合、障がい者自身は、どのようにすれば良いか？そのことを考えておかなければならないと思うのです。

災害がいつやってくるか予測できないことについて、あらかじめ考え、準備しておくことも必要なのだと思います。(非常食、簡易トイレなど。必要な物を購入して用意しておく。)

障がい者が安心して行ける福祉避難所というのは、全ての人を使いやすい避難所になっていること、入り口を広くすること、階段ではなく、スロープをつけること。知的や自閉症の障がいがある人の場合、集団生活が難しい人もいます。そのことを考えると、福祉避難所は分けて別に建てる必要もあるのではないかととも思う。

そのような対策も考えなければならないと私は思います。

「3. 11から10年 福島の現在・過去・未来」

にんじん舎 和田 庄司

概要

みなさんお久しぶりです。白石さんといっしょに支援センターふくしまにいた和田です。

今の自分は、「かたひら畑」で色々な人たちに来てもらえる畑をやっています。

福島で農業をやれるのか、福島で野菜をつくっていいのかと苦しみ、色々な手を打ちながらしつこく土を耕してきました。現状は原発から50キロの郡山で安全な野菜を生産できると思いますが、みんなの安心を得ることは難しいかもしれません。郡山は福島県で一番のコメの生産量なのですか、福島のコメは震災後、産地がでない業務米としての生産量が日本一になってしまいました。こんな現状がまだまだ福島にはあります。もちろん10年たっても未だ戻れない場所が、住むことができない場所があり、多くの人が避難しています。

震災からの教訓

「遠慮、気兼ね、あきらめ、我慢」迷惑をかけるからと避難しない、できない人が、災害時に今もたくさんいること。国に避難行動要支援者の問題、福祉避難所の問題を言い続けてきましたが、それでも、避難できない人がいるのです。「迷惑をかけあえる」そんな地域にならないと、このことは変わらないと思っています。これは今までもずっとみなさんがやってきたこと。これを今、畑でみんなと感じ合いながら土を耕しています。文化として根付くためには、小さくとも地道に長く続けることが、様々な場所でおこなわれることが大事かなと思います。もちろん、一番の教訓はどんな防災対策を作っても、まったく対応できないのが原発事故です。「原発を動かさないことが最も大切な防災対策」これが福島の教訓です。

あの日から10年

今自分が、ここに生きているのは、「ひとりじゃない」と思えたから。あの時からそう思えたから。そして、「助けを求める人を自分は見捨ててはいないのか」と問い続けてきたから。そんな気がします。そんなことをあらためて思うようになりました。

そして、福島にいと復興していくということは、懐かしかった風景や今までの日常を、壊し変えていくことなのかなあと思うことが多いです。あの日から色々なものが変わりました。自分よりもっともっと、変わってしまった人たちがいます。そんななか、なかなか変えられず、捨てられず、土を耕しています。一人一人がそれぞれ、自分で苦しみながら決め、変えなけれ

ばならなかったこと、変えられなかったこと、そんな十年をみんなが過ごしてきたように思います。

「3.11 から 10 年。福島の現在、過去、未来」

発言要旨 青田由幸

現在

相馬市 直接死 439 人 災害関連死 29 人

福島県 直接死 1,831 人 災害関連死 2,321 人

双葉郡（原発立地、隣接市町村）8 町村

直接死 256 人 災害関連死 1,504 人

関連死は直接死の 6 倍を超えていて今も増え続ける

福島県避難状況

県外避難者数 28,171 人

県内避難者数 7,093 人 合計 35,264 人

人口 町内居住者

双葉町 H23/3 7,140 人 R3/1 0 人

大熊町 H23/3 10,505 人 R2/8250 人

浪江町 H23/3 21,434 人 R3/1 1,579 人

富岡町 H23/3 15,960 人 R3/1 1,576 人

楡葉町 H23/3 8,011 人 R3/1 4,038 人

広野町 H23/3 5,490 人 R3/1 4,216 人

川内村 H23/3 3,038 人 R1/8 2,165 人

葛尾村 H23/3 1,567 人 R3/2 327 人

飯館村 H23/3 6,509 人 R3/2 769 人

*避難者たちへの被爆差別・子どもたちへのいじめ

*小児甲状腺がんの実態と国の責任回避 206 人自己責任？

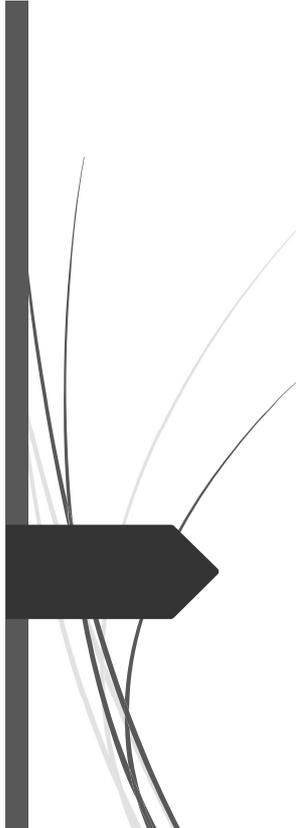
*優生思想の新たな復活

*ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ

・県は原発事故との因果関係については「これまでのところ放射線の影響は考えにくいと、従来通りの結論で一致した。

・甲状腺がんの子どもたちに対して、県や国が放射能の影響ではないと、強く発言すればするほど、ふくしまの子どもたち自身の自己責任になってしまう。

- ・ 様々な影響は自分のせい？
 - ・ がんやがんの疑いと診断された患者の地域別割合は、事故の避難区域に指定された沿岸部などの 13 市町村が最も高いとの結果が報告された。(令和 2 年 11 月 30 日)
 - ・ 復興、再建ができない→東電から 努力が足りない
 - ・ 経済の復旧が困難→コロナのせい
 - ・ 汚染土の再利用→建設副産物の再利用
 - ・ 汚染水の海洋放出→処理水→タンク満杯
 - ・ 農水省へ→安全な処理水であれば他県で処理→他県の理解が得られない
 - ・ 除染無しでの帰還困難区域解除
 - ・ 事故の責任者がいない→加害者に大丈夫と言われている
 - ・ 帰還するか否か→自己決定を促す→帰還しない ←支援制度無←国の責任放
 - ・ 住民の不安→理解の欠如→過剰反応→勉強不足・知識不足 ←国・東電の責任すり替え
 - ・ 中間貯蔵施設→最終処分場、高濃度放射能ジブリはどこに保管・処分
 - ・ 全国の使用済み燃料棒の行方は→ふくしまへ？
 - ・ 住民、避難者の健康・生活よりも経済復興
 - ・ 医療、福祉の現場崩壊 医師、看護師、介護士、支援員、ヘルパー
 - ・ 圧倒的人材不足
 - ・ 南相馬市要介護認定 38%増 要介護者重度化 50%増
 - ・ ヘルパー激減
- * 包括支援センター、相談支援連絡会、ケアマネ等の連携の徹底
- * 災害時対応 危機管理課、長寿福祉課、障害福祉課、自立支援協議会との具体的対応の構築



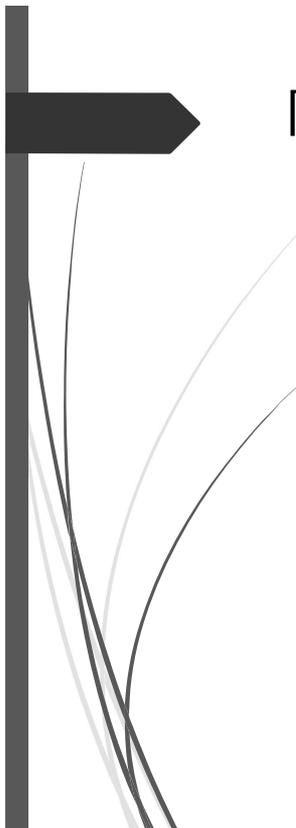
震災と原発事故をあわせて 「震災」という福島県民の 不思議

長谷川秀雄

NPO法人いわき自立生活センター理事長

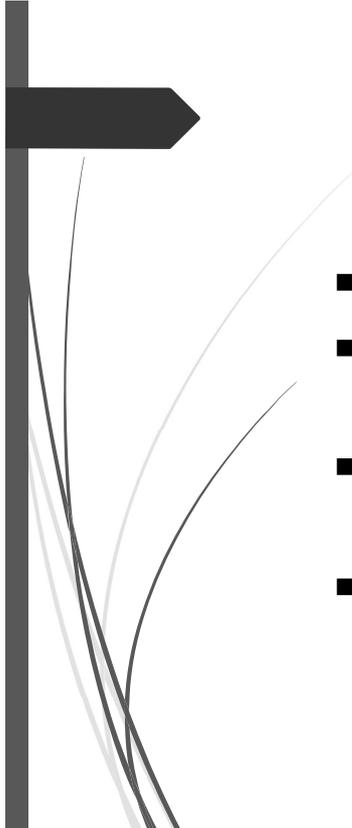
NPO法人みんぷく理事長

2021. 3. 21 福祉のまちづくり学会セミナー



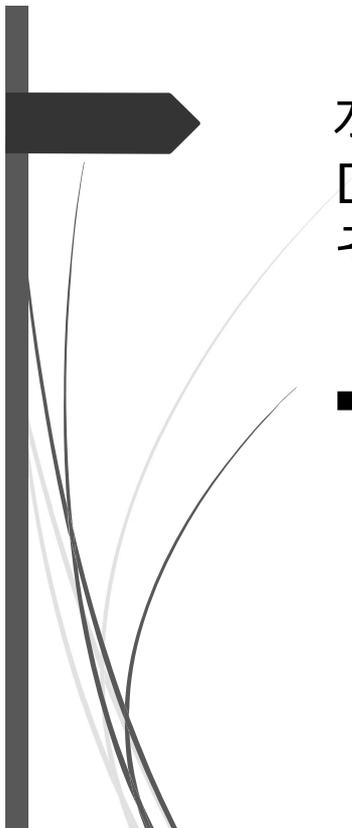
「震災で観光客が激減した土湯温泉で・・・」 池上彰氏（評論家）が福島市土湯温泉の地 熱発電をTV取材したときの発言

- あれ？観光客が激減したのは原発事故が原因だったはず・・・？
- 震災と原発事故をひっくるめて、震災という福島県民が多い
- ポケモンやスマホ等と同様の単なる省略形 ただそれだけなのか？



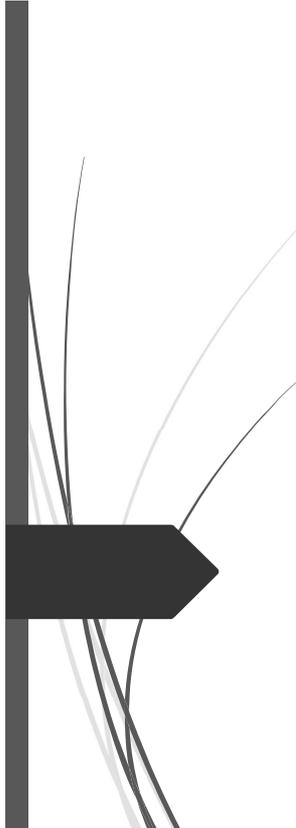
そもそも2つは別々の災難

- 地震と津波は自然災害
- 原発事故は、東京電力という民間企業が引き起こした、広域かつ深刻な環境汚染
- 加害企業があり、原発を政策的に推進し、電力会社を指導監督してきた国にも重い責任がある
- 前例があるとしたら、水俣病問題



水俣病問題で、「水俣市の復興」というスローガンは聞いたことがない。
それは、馴染まないと思うはず。

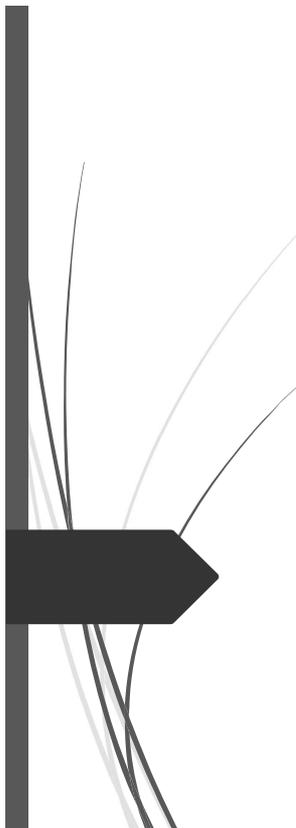
- では、福島第一原発事故では、双葉郡の原発事故からの復興というスローガンが定着しているのはなぜか？



津波で発電停止となったのは、原発だけではない

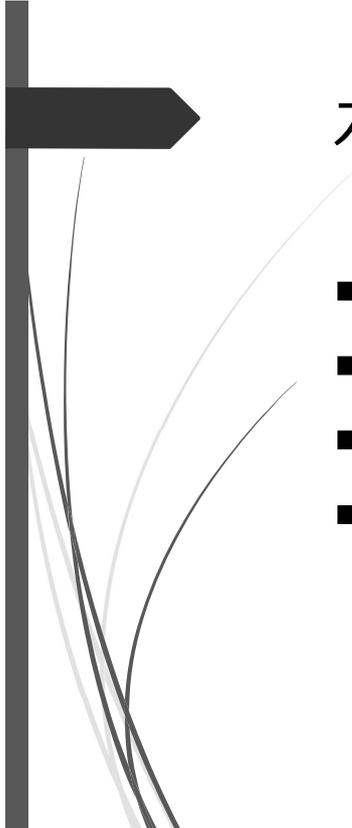
東京電力広野発電所や常磐共同火力発電所は、およそ半年間の発電停止となった。

しかし、周辺住民が避難することにはならなかった。原発との決定的な違い。



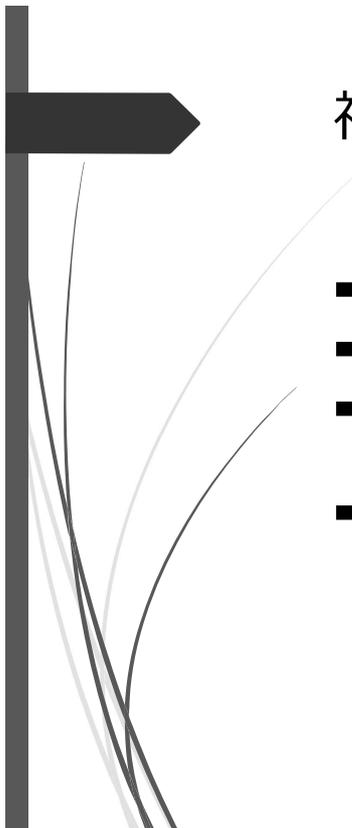
復興とは、避難の解消 = 元の場所で町の再建 生業の再生を意味する

原発事故もこの方法論が主力であり、そこに公害問題への対応策が、さりげなく差し込まれてきた。



水俣の例

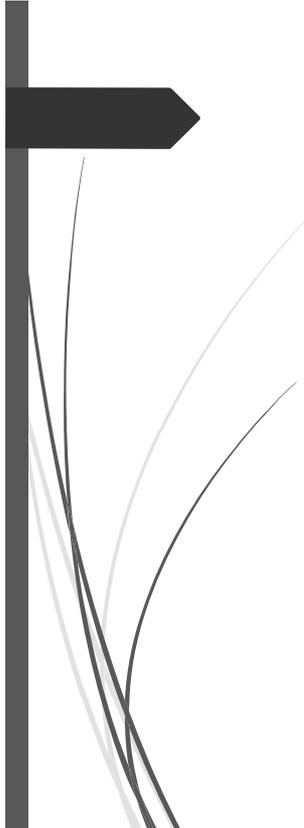
- ①治せ ⇒治療 健康調査の実施
- ②償え ⇒認定と賠償
- ③封じ込めろ ⇒汚染物質の回収と埋め立て
- ④繰り返すな ⇒水俣市立水俣病資料館 民間の水俣病センター相思社



福島第一原発時では、これが

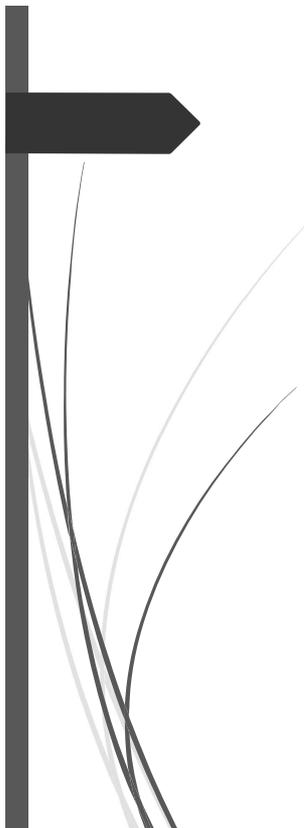
- ①治せ ⇒甲状腺検査 県民健康調査
- ②償え ⇒東電による賠償金 ADR仲介システム
- ③封じ込めろ ⇒汚染土を回収して、仮置き場へ。現在は中間貯蔵施設へ移送作業中
- ④繰り返すな ⇒東日本大震災・原子力災害伝承館の設置など

見事に符合している。



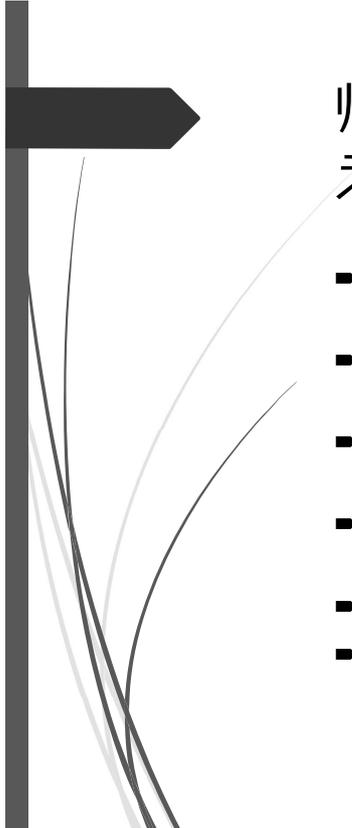
「とどまる 避難する 帰るの自己決定を尊重し、その実現を支援する」という原発事故子ども・被災者法の理念が骨抜きになってきている

- 帰還者支援に全力を挙げ、避難を継続している方への支援が絞られてきているのも、この「自然災害からの復興論」の転用によるもの、と私は考える



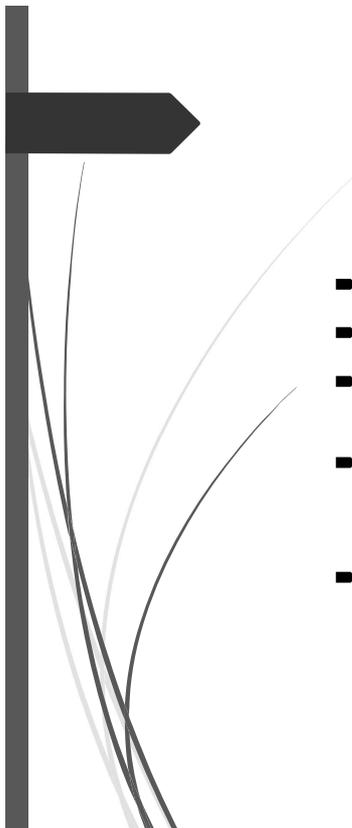
原発事故子ども・被災者支援法の理念を実現するために

- 復興予算が縮小していく中で、避難を継続している人たちへの支援を継続していくために、他の福祉施策に移行していくことを検討中。
- 生活困窮者自立支援法の相談員か、介護保険法の生活支援生活支援コーディネーターを考えている。しかし、ふたつとも委託が町役場であることがネックとなっている。ひとつの復興公営住宅（原発事故避難者むけ）に複数の町村からの避難者が住んでいること、加えて他の市民も入居してきていることから、制度の枠組みにはまりづらい。「双葉広域連合」との委託というようなことが考えられないか？
- 町役場や社協も帰還していくため、避難中の住民への関わりは、どんどん弱体化していく。避難継続中の住民の広義のケアをどうするかは、重大な問題。



帰還した住民のコミュニティ再建をどう考えるのか？

- ▶ 富岡町で暮らす住民約1700名のうち、廃炉作業員とその家族が約半数を占めている。
- ▶ これら「新住民」と、もともとの住民とで、どうコミュニティを再建していくか？
- ▶ 3年ほど前の浪江町でのシンポジウムで、初めて聞いた「双葉郡のまちづくり」というスローガンに驚いた私。なにが起きようとしているのか？混乱。
- ▶ 「避難を解除したんだから放射線の測定などしなくてもいい」「そんなことをしていると風評被害になりかねない」という役場職員もいるが。同意できない。
- ▶ 不都合なことを隠しているのか？と逆効果になる。
- ▶ 「測って、公表する」環境汚染があった地域で暮らしていくためには、これが不可欠



原発原罪論

- ▶ 動かなくなった原発の周囲に、新しい「原発城下町」が出来つつある。
- ▶ 廃炉産業の研究開発が進み、輸出産業になっていくかも。
- ▶ 廃炉になった原発と放射性物質の超長期(数万年)管理に、どんどんお金が吸い込まれていく構造。これほど資本主義の論理に逆行するものも他にないだろう。
- ▶ しかし、今直ちに脱原発を実行しても、廃炉作業と放射性物質の超長期的管理という負の遺産を、私たちは子孫に残してしまうことに「原罪」を思わざるをえない。
- ▶ いわき市新舞子浜地区には数キロにも及ぶ防風林(松の木)があり、津波の威力の軽減に効果を発揮した。これは私たちの先祖が、子や孫のために植林してくれたものであった。私たちの世代は、これと真逆のことを子孫にしてしまったのではないだろうか？

■災害発生から避難まで

2011年3月11日金曜日2時46分、東日本大震災が発生した。岩手、宮城、福島は地震、津波、そして福島においては原発事故が起った。

その瞬間から私達の日常が変わってしまった。私達の事業所も大きな長い揺れが続き利用者の安否確認の後、家族という仲間には安全な方法で帰宅してもらい自立生活をしている私たち三人は、あまりの余震にその日は、ヘルパーさんと共に事業所に宿泊の決断をし眠れない夜を明かした。そして次の日12日には福島県内は、原発事故が起こり、「放射能が飛ぶから外に出ないように」とか「国道288号線が避難者で混んでいる」と言う慌しい会話に言い知れない怖さと不安を感じた。そして原発が爆発。浜通り地区の住民をはじめ、福島県民は避難が求められるようになった。

■避難生活と支援

私達の事業所も関係者が集まり、3月中の休業を決め、それぞれが、避難をはじめの事になる。障がいを持つ私達も震災から4日目、ヘルパーさんや理事長と共に、南会津の国民宿舎のような所に避難をした。ところが「障がいを持つ人は見た事がない」と言うような態度に、大きな心のバリアを感じ、新たな避難生活を送れる場所を探したところ、新潟県の新発田市を見つける事ができた。新潟県は2005年の中越地震経験から、いち早く避難者の受け入れをはじめたそうである。障がいのある私達を快く受け入れて下さったホテルのおかげで、震災、津波、原発事故から10日余りにして、ようやく落ち着く事ができた。長引く避難を考えた私達は、次の日から事業所の仲間の安否確認や職員の居場所を確認しながら、地元の自立生活センターの仲間と繋がる事ができ、家探しや役所などの情報等を頂く事ができた。そして震災当日から一般の避難所で過ごしていた浜通りに住む仲間から「助けてほしい」という連絡があり、スタッフの送迎で新発田市に迎える事ができ、自立生活支援が始まった。家探しや、制度の手続き等、話を聞いたり、地元の自立生活センターの代表や仲間にお世話になり、落ち着く事ができた。一旦は福島に戻った私達も、月一度の割合で新発田市に行き、支援を続けた。今現在、本人は地元の浜通りに戻り、一人暮らしをしている。

■原発事故による生活

一方私たちの事業所は、震災から一ヵ月後の4月から事業所を再開したが、見えない放射能との戦いとなった。「住む場所、食事、外に洗濯物を干す、干さない」自己選択、自己決定、自己責任が、まさしく問われるようになる。しばらくの間、新発田市に残った仲間がいた事により、新鮮な野菜などの買い物を頼んでの生活をするようになった。また、事業所とは別に「市民測定所」を設け、放射線の測定をするようになった。原発事故に関する学習会を地元で開催したり、私達以外の事業所の仲間にも原発事故について知ってほしく、優しい言葉で分かりやすく、「原発事故って何？」と言う題名で、お話を聞いたこともある。

また、全国のたくさんの人々から新鮮な野菜の提供や情報提供を頂いた事、静岡から月に一度野菜を買い、なるべく安心な物を口に入れるように事業所全体で取り組んだ事を思い出す。

■最後に

原発事故が起きた事で、福島県民は避難先で風評被害やいじめにあった事などを知人から聞いたこともある。自然が壊され、人々の心までも壊され、住む場所も追われた。私は現場を見る事はできないが、浜通り地区の避難区域の家は、動物の棲み処にとり人間は住めなくなったという報道に私は胸を締め付けられる。東日本大震災から10年が過ぎたが、福島はまだ復興には、遠い道のりを感じるのは私だけだろうか。東日本大震災以降、毎年のように異常気象による大きな災害が全国各地で起きている。大きな災害に遭遇した時、私達は障がい者として、自分の命を守り、仲間の命を守れるのか、更には、避難場所をどのように選んで行くのか。東日本大震災と原発事故で避難生活を体験した私は、災害が起きた時の避難所が、近隣に、特定されていない事は、不安であり、最短距離のホテルを利用する事ができるのだろうか？等々。弱者にとり安全と安心を取り戻すには、突然の災害については、たくさんの課題が残されている

東日本大震災と原発事故により、支援して頂いた皆様に、紙面を借りまして感謝を申し上げます。ありがとうございました。



Start Line
自立生活センター
自立の魂
～略してじりたま！～
<http://www.jiritama.jp/>

本日のお題

3.11から10年。福島の現在、過去、未来
『横浜で感じた東日本大震災』
2021年6月23日(水)

自立生活センター 自立の魂
～略してじりたま！～

代表 磯部 浩司

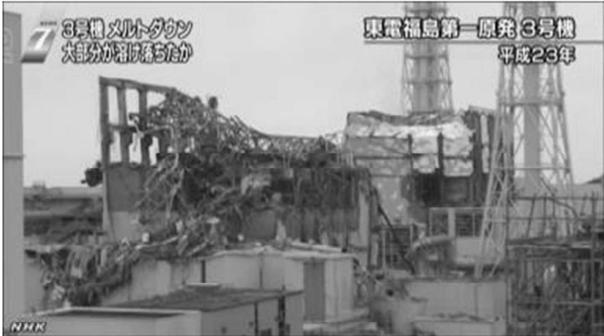
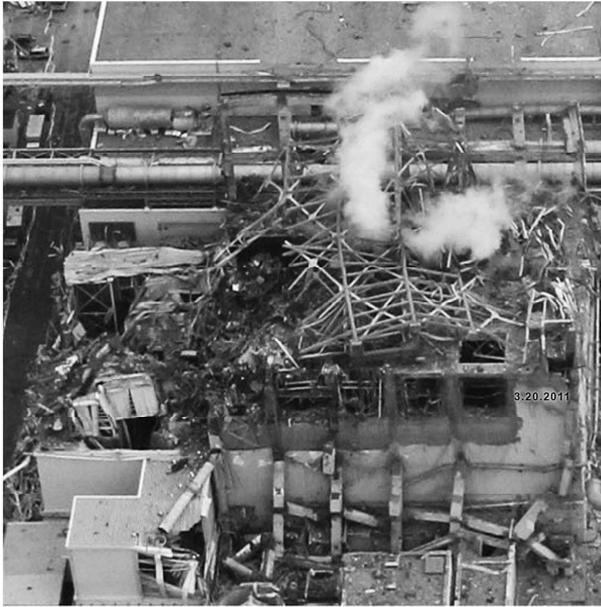
横浜の様子(磯部撮影) 2011年3月



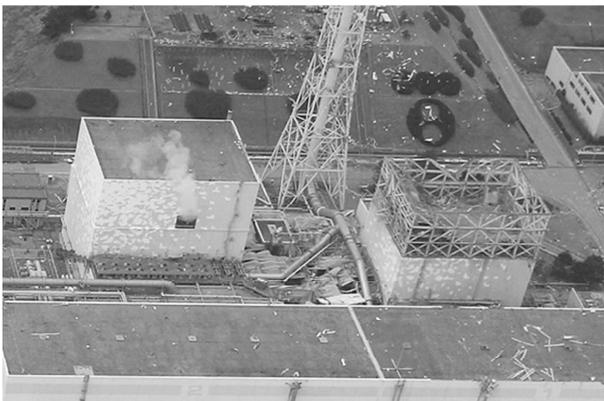
横浜の様子(磯部撮影) 2011年3月



恐れていたことが・・・福島第一原発事故発生



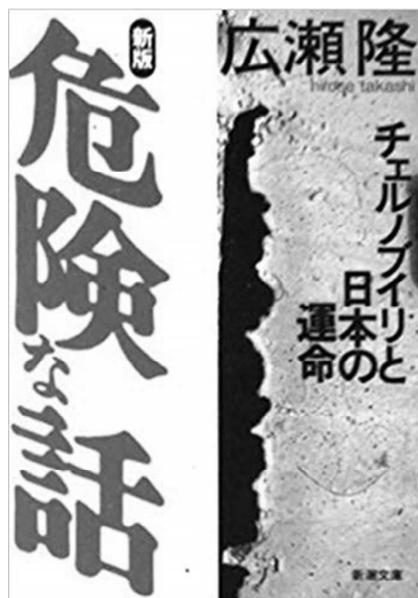
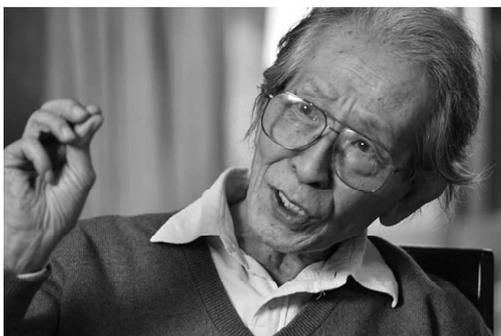
恐れていたことが・・・福島第一原発事故発生



自分のルーツ 『はだしのゲン』



自分のルーツ 作家・広瀬隆さんとの出会い



●プロフィール

1943年/昭和18年東京生まれ。
早稲田大学工学部応用化学科卒業。
メーカーの技術者を経て、執筆活動を開始、
医学文献等の翻訳に携わる。

自分のルーツ ベラルーシの子供たち(1995年)



東日本大震災が起きた当時の想い

✦ 福島の子供たちは大丈夫なのか？！

✦ 障害者救援本部(戸山サンライズへの避難)

✦ 横浜あゆみ荘への避難は？

✦ 「原発の安全神話や危険性が知れ渡る」と思った

✦ 「これで原発が終わる」と思った、が…。

原発問題と障害者問題

✦ 登くんとの出会い

✦ 東日本大震災での差別と偏見

✦ 専門家・有識者＝安全神話

✦ 自主避難者の支援打ち切り

✦ 黒人作業員の基準

小野くんとの出会い(2012年5月31日)



小野くんと活動

✦ なぜ小野くんを受け入れたのか？

✦ 東日本大震災の被災者だからではありません

✦ 一緒に活動して行きたいと思ったから

✦ 東日本大震災を経験した“当事者の声”の重要性

✦ 福島との架け橋

障害者エンパワメントプロジェクト2020

主催 自立生活センター 自立の魂 ～略してじりたま！～

障害者エンパワメントプロジェクト2020

in YOKOHAMA

～東日本大震災と向き合えるインクルーシブ社会を目指して～

EMPOWERMENT

DISABILITY



INDEPENDENCE

INCLUSIVE

Organized by CIL Passion for Independence -Call me Jiritama!
Disability Empowerment Project 2020 in YOKOHAMA
-Towards an inclusive society that can face The 2011 Tohoku Earthquake and Tsunami-



障害者エンパワメントプロジェクト2020

✦ 参加者同士のエンパワメント(被災地からの教訓)

✦ 被災者の体と心のリフレッシュ(保養、楽しむ)

✦ 今後の自立生活運動に向けて(バリアフリー調査)

✦ 東日本大震災を風化をさせない

✦ 東日本大震災を未来に繋げる

障害者エンパワメントプロジェクト2020

じりたま チャリTシャツ
絶賛発売中!



じりたま エンパワ 検索 





Japan Council on Independent Living Centers
全国自立生活センター協議会

東京都八王子市明神町 4-11-11 シルクヒルズ大塚 1F

TEL : 042-660-7747

FAX : 042-660-7746

JIL はキリン福祉財団の助成を受けて活動しております

所属先

名前